慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ICOM UMAC ヘルシンキ大会報告
Sub Title	
Author	本間, 友(Honma, Yū)
Publisher	慶應義塾大学デジタルメディア・コンテンツ統合研究センター
Publication year	2018
Jtitle	慶應義塾大学DMC紀要 (DMC review Keio University). Vol.5, No.1 (2018. 3) ,p.66- 69
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO32002001-00000005-0066

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ICOM UMAC

ヘルシンキ大会報告

本間 友
（慶應義塾大学アート・センター所員・
文学部非常勤講師）

ICOM UMAC（International Council of Museums Committee for University Museums and Collections）は、大学ミュージアムや大学が保有するコレクションに関わる活動を対象として、国際的かつ学際的な議論を行う場として設定された委員会である。筆者は、2017 年 9 月に開催された第 17 回年次大会「Global Issues in University Museums and Collections: Objects, Ideas, Ideologies, People」（ヘルシンキ大学・ユバスキュラ大学）に参加し、学術研究成果を媒介として、地域の文化資源の顕在化と活性化を図るプロジェクト「都市のカルチュラル・ナラティヴ」（慶應義塾大学アート・センター、2016 年〜）の活動について報告を行った。

報告したプロジェクトの活動は、2018 年 3 月に刊行されるプロジェクト・マガジン「ARTEFACT」に詳細が掲載されるため割愛し、本レポートでは、UMAC 大会の内容を簡潔に紹介したいと思う。

※ICOM UMAC：
http://umac.icom.museum

※「都市のカルチュラル・ナラティヴ」
http://art-c.keio.ac.jp/-/artefact

1．Professional Development Workshop

大会のメインプログラムに先駆けて、「Professional Development Workshop（専門研修ワークショップ）」が開催された。「Surviving and Thriving within a Parent Institution」というテーマは、ミュージアムの活動を進めることが、組織全体の中心的なミッションにかならずしも組み込まれていないという大学の状況を反映した、非常に現実的なテーマ設定であると感じた。また、非ミュージアム組織による運営という点から言えば、企業博物館などとも共有できるテーマであり、今後、大学ミュージアムという枠を越えた課題の共有や連携の可能性を感じた。

ワークショップでは、Mission／Governance／Strategic Planning／Collections Planning／Educational Role が主な議論の対象となった。「Mission」では、ミュージアムのミッションと大学本体のミッションとの連結からはじまり、大学内の他のミュージアムや同窓会組織など、大学の内外においてミュージアムと関わりを持つグループに対し、ミュージアムの活動をどのように位置づけ、説明していくのか、という観点から議論が行われた。また、「Educational Role」では、大学ミュージアムの大きな特長である教育・研究活動との連携が取り上げられた。大学の教員との積極的な共同の必要性や、アカデミック／社会・文化／実務など様々な観点での学生教育について検討がなされた。

２．The 17th annual UMAC conference

カンファレンスでは、24 の国と地域、42 の大学ミュージアムとコレクションからの発表が行われた。基調講演、口頭発表、ショート・プレゼンテーション（Inform-All Presentation）、ポスター発表からなるプレゼンテーションは、大きく「倫理規範」「来館者とのエンゲージメント」「教育」「コラボレーション」「国際化」の 5 つのテーマにグループ化されていた。

「倫理規範」では、ミイラや遺体、医学標本のコレクションや展示を巡って、展示を可能にする物語の作り方や展示の方法などについて、現代の倫理規範を参照しながらの発表が行われた。

「来館者とのエンゲージメント」では、来館者の議論や学習を促進するための取組の紹介や、デジタル技術活用の長短、より広い学術的・文化的なコンテクストから見た大学コレクションの意義が語られたほか、来館者数の分析手法について新しい提案を試みる発表もあった。

「教育」においては、展示やコレクションを研究・教育の材料として積極的に活用するための方法や、移転可能なスキル教育（Transferable Skills）の場、また、ミュージアムの社会プラットフォームとしての役割に関する検討がみられた。

「コラボレーション」では、ミュージアムにおける芸術家との共同プロジェクト、地域の文化セクターとの連携のケース・スタディや、民間企業との共同によるサステナビリティの確保などが話題となった。

最後に「国際化」については、大学が一層の国際化を迎えるなかで、ミュージアムの活動をどのように変化させていくのか、国際的・学際的な展示やコレクションの実現についての議論が交わされた。

次項では、これらの議論の中から、慶應義塾大学における活動と関連する発表をいくつか紹介したい。

３．カンファレンスでの発表から：新しいミュージアムの役割／研究とミュージアム／アーティストとのコラボレーション／大学の国際化とミュージアム／デジタル教材

Museum L: Catholic University of Louvain（ベルギー）※

ベルギーの Catholic University of Louvain からは、2017 年にオープンした新しいミュージアムでの活動が報告された。Museum L と名付けられたこの施設は、17 世紀の建築をリノベーションした建物に、展示・図書館・教室・講堂・ワークショップルームなど、ユーザー体験を充実させるスペースを備える。Museum L は、来館者やミュージアムのスタッフ自身が、それぞれにプロジェクトを持ち寄り、ディスカッションや共有を通したクリエイティヴな活動をする場として位置づけられている。ミュージアムにおける新たなユーザーエンゲージメントのあり方として、今後の活動に注目したい。

※Museum L
http://www.museel.be/en

Economic Minerals & Geology Collection: The Australian National University, Canberra（オーストラリア）

カンベラ大学からは、鉱物・地質コレクションを題材に、大学の研究領域と大学のコレクションの関わりについての報告があった。アカデミックなコレクションが大学に蓄積されている場合、そのコレクションと結びついた研究領域の方法論や教育論が変化した場合に、コレクションの大学内での位置づけがどう変化するのか、また新たに学生や教員などの学内外のアカデミック・コミュニティとコレクションを連結していくためにはどうすればよいのか、という議論があり、大学のコレクションのライフサイクルを考える上で示唆的な発表だった。

Musée des Arts et Métiers: Conservatoire National des Arts et Métiers（フランス）

フランス国立工芸院のミュージアムからは、アーティストとのコラボレーションが、ミュージアムに関わるコミュニティに与える影響についての報告があった。同種のプロジェクトにおいては、来館者からの反応が報告されることが多いが、今回は、来館者だけではなく、アーティスト自身、またミュージアムで働くスタッフ（学芸員、職員）からも率直な意見を得ていた点が新鮮だった。

Museum of East China Normal University（中国）

中国からは、大学の国際化とミュージアムの活動についての報告があった。過去10年で、中国では大学ミュージアムと留学生の数が急激に増加している。それに伴い、ミュージアムでは文化交流の機会が増えた一方、展覧会においてカルチュアル・アイデンティティどのように取り上げるかが課題となっている。日本の大学でも国際化プログラムが進み、留学生向けの授業などの開講も増えてきていることから、大学ミュージアムでの展示が留学生にどのように映るのか、いま一度検討する必要があると感じた。

Cabinet Project: Oxford Internet Institute, University of Oxford（イギリス）

今回のカンファレンスでは、デジタル・ツールの活用についてさほど多く取り上げられていなかったが、オックスフォード大学のCabinetプロジェクトの報告は一際目を引くものだった。Cabinetは、ミュージアムの作品を使った大学の授業（Object Based Study）を補助するオンラインプラットフォームであり、ミュージアムのコレクションを、アナログ・バーチャルの両面から活用し、学際的な教育を実装するツールの例として非常に興味深かった。

発表後、Cabinetプロジェクトの研究者とディスカッションの機会を得て、MoSaICについて、DMCセンターでのデジタル・ミュージアムの試みについて簡単な紹介を行

った。その際、作品に寄せられる多様な視点を可視化するためのデジタル・ツールについて、事例の共有をしてゆきたい、という話をしたが、年が変わらない 12 月に、金子晋丈氏と早速にオックスフォードを訪問し、より詳細な情報共有をできたことは、大きな成果と言える。

ICOM UMAC は、大学ミュージアムの専門部会であるだけに、館種や主題領域は違えど、問題意識や関心を共有することができる研究者が集っているため、今回のような、素早いリレーションの構築に繋がりやすい特徴があるように思う。今後も可能な限りコンファレンスやワークショップに参加し、研究交流に繋げたいと考えている。

※ 本報告は、慶應義塾大学アート・センターニュースレター『ARTLET』（48 号、2017）に掲載した報告を元に、内容を拡充して執筆した。

本間 友（ほんま ゆう）
慶應義塾大学アート・センター所員・文学部非常勤講師。2006 年慶應義塾大学大学院文学研究科美学美術史学修了（修士）
専門は美術史および芸術情報の流通。